

稻垣家住宅移築保存事業について

国登録有形文化財であった大淵の稻垣家住宅は、文化元年（1804）に建築された市内で最も古い民家であり、平成18年に8代目の現当主から寄贈を受け、市指定有形文化財となりました。現在の屋根は兜造の茅葺ですが、これは、明治時代中期に養蚕を行うために改造されたものとみられ、稻垣家住宅の特徴がよく現れているこの時代の状況に復原をしました。

なお、稻垣家住宅は、広見公園ふるさと村構想に基づき、文化財としての保存を図りながら、一般公開をはじめ体験学習の場として広く活用できる施設を目指し、移築保存事業を行いました。

■移築保存事業の状況

解体工事を行いながら詳細調査を実施し、その成果に考案を加えて移築復原を実施しました。



増築部分の解体 平成19年10月



土壁下地の調査 平成19年11月



大黒柱に牛梁を組む 平成20年4月



兜造部分を組む 平成20年4月



小屋組を竹でしばる 平成20年5月



屋根を葺く 平成20年7月

利用の案内

稻垣家住宅は、広見公園ふるさと村歴史ゾーン内に移築復原されています。公園内では、その他6棟の市指定有形文化財を含む貴重な文化財を見学いただけます。

詳しい利用方法等については、富士市立博物館へお問い合わせください。

■古民家のおもむき

稻垣家住宅は、軸部梁間方向では、長さ8m余りにも及ぶ1本ものの曲がりくねった長大な松の梁が多く用いられ、土間上部桁行方向では、根曲がありのある太い牛梁が用いられているなど、古民家に特有の重厚な趣を見るすることができます。

なお、かまどと3箇所の囲炉裏が復原されているほか、養蚕のための工夫が随所に見られる建物です。定期的に囲炉裏を焚きますので、囲炉裏に火をくべた古民家の雰囲気を室内に上がって味わっていただくことができます。

■参加・体験型施設

博物館では、稻垣家住宅を文化財として保存し、公開とともに、様々な展示会や体験学習・講習会を開催する予定です。また、古民家を活用しての展示会・茶会・コンサート会場などとして、市民の皆様に貸し出しを行いますので、御活用ください。

■お問い合わせ

富士市立博物館

〒417-0061 静岡県富士市伝法66番地の2

電話0545-21-3380 FAX0545-21-3398

E-mail museum@div.city.fuji.shizuoka.jp



富士市指定有形文化財

稻垣家住宅



富士市教育委員会

稻垣家住宅について

稻垣家住宅は、文化元年（1804）に建築された市内で最も古い茅葺屋根の民家です。富士山麓周辺においても貴重なこの建物は、明治時代中期に養蚕を行うために兜造の屋根に改造されたとみられています。その他、蚕を育てる部屋を保温するための囲炉裏や、その熱が小屋裏へ抜けるように張った簀子状の天井板など、養蚕農家としての工夫が随所に見られます。

建物の特徴的な技法としては、小屋組を縛る材料に竹を使用している点、土壁下舞下地の間渡し竹を止める際に竹片を打ち込んでいる点などがあげられます。これらは全国的に珍しい技法です。

■兜造の屋根

兜造とは、両妻面に窓を開けて通風と採光を図ったもので、小屋裏部分を広く使うことができます。屋根の形が兜に似ていることからその名がついています。

稻垣家住宅は、東側は寄棟造の妻端を垂直に切り落とした屋根形式、西側は入母屋造の妻端を切り落とした屋根形式を見せた兜造の構造となっています。



東側



西側

■建築時期

現存する棟札から、文化元年9月13日に着工し、同年の12月16日には上棟式が行われたという、短期間に建てられたことがわかります。



稻垣家棟札（表）

■土壁下地間渡し竹の止め方

長さ3～5寸、幅5分ほどの先端を尖らせた竹を用いて木部に打ち込み、そこへ半割りの篠竹をかぶせるようにあてて縄でしばっています（通例は、木部に間渡し穴を掘り、竹を差し込んで釘止めとする）。甲信・北陸・四国地方で同様の技法が若干報告されているのみです。この竹片は石川県ではウグイス、高知県ではズメなどと呼ばれています。



■越屋根

棟には煙出しのための越屋根が設けられていました。解体時には現存していませんでしたが、古写真等をもとに復原を行いました。

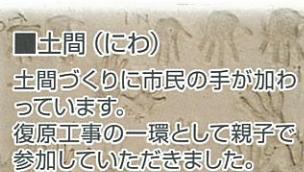


昭和初期の稻垣家住宅

養蚕のためのくふう

■簀子状の天井板

室内を暖めるために1階で焚く囲炉裏の熱と煙が小屋裏へ抜けるように、南北2筋の天井板を簀子状に張っています。



■かまど

地下調査の結果、かまど石の断片が見つかり、富士山の溶岩を成形して造られたものとわかりました。



■小屋組に竹を使用

藁縄を使用することが一般的ですが、地域的に大淵では稻作があり行われていなかったため、藁縄は入手しにくく、近隣で豊富に得られる竹を使用したとみられます。



■藁打ち石

土間の入口脇に残っていました。藁をこの石の上で動かしながら、木槌で叩いて柔らかくして縄などをないました。

